

小須戸の園芸

その始まり (伝承)

明治四十四年刊の『新潟県園芸要鑑』に小須戸の園芸関係について次の如く述べてある。(なお大正六年刊の『中蒲原郡誌』はこれを転記したものである。)

製の栽培 安政年中、鶴出古木の佐藤権六及び竜玄新田の渡辺惣左衛門が茨曾根村東萱場の阿部源左衛門より梨樹栽培の方法を伝習し、又味方村大字山王の与平次なる者に就いて実地指導を受け、然る後栽培に従事せるを本町に於ける梨樹栽培のはじめとす。苗木の養成 本町に於て果樹の苗木を養成するに至りしは今を距る三十四年以前(明治初年)に加藤弥三次と云へるが埼玉地方にてその枝を伝習し、帰りに之を営みたるをはじめとす。

盆栽の販売 今より五六十年前(幕末)鶴出古木藤井太郎右衛門及び加藤六兵衛、佐藤権六等が常にこれを愛玩して親戚知にも分譲し、且つ漸次増殖を謀りしより隣近に普及して遂に是を業と為すもの

輩出するに至りしなり

以上のごとくであるが、その始源についてはやや明瞭を欠くところがあり、次のこともあわせ参照いただきたい。

幕末の植木屋

市之瀬新田(当時小須戸組)名主小泉善之助(蒼軒)の述著に「両組産業開物之巻」のな記録がある。この記録は慶応二年(一八六六)新発田領新津・小須戸両組の村々の実態を述べ、とくに副業の様相とその将来の見通しについて郡御役所へ報告した調査書の写しである。

まず「鶴出古木」の条項であるが「当村農家四十八軒之内三十宅軒ハ可也取統戸」として、長右衛門・六平・作左衛門・重左衛門・権六・権兵衛の六軒の植木専業、副業者が記されている。なお当時の鶴出古木の副業は、植木・箸・鮎・質機織・質糸引・綿打・箸削・団扇等、「團扇(うちわ)は残らず波張り、箸は何れも木の長簀に御座候」と記され

ている。

つぎに「小須戸」の条項であるが「当町民戸六百貳軒の内貳百七拾八軒大中前ニテ可也取統戸」此ノ内農業一途軒働候者僅ニ廿六軒之男女五十八人ノ外御座無ク」として機織の者貳百八拾九人を筆頭に町の生業が詳細に記されている。その中に「植木売四人」と記されている。

その外、子成場村に一軒の業者と四人の植木・接木の余業、梅之木村に「杉・からち」を始め其の外必用に相成るべき果木の苗・草花等」を追々手がける者がある。記されているが、すでに幕末に鶴出古木・小須戸に十軒内外の業者があり、古田に二百五十年前の八珍柿の原木があり、天明・寛政に子成場柿(一名孫兵衛柿)の栽培あり、また同じく子成場に天保の頃すでに草花栽培があったと記録されていることから見て、小須戸地内の園芸のおこりは、上述の伝承よりはもと古く、上記記人名は特別の研究者を始源として述べたものであろう。

明治初年の園芸

以上のものが、明治十六年「中蒲原郡小須戸組商金高調」によると、小須戸町(鶴出古木を含む)二十四軒、竜玄新田二軒、子成場十五軒、出戸四軒、小戸新田十軒の植木業者の記録があり、小須戸を中心として植木専業者が確実に定着している。

なお五十余町歩にわたる信濃川の園圃は当時、梨を主とした果樹・蔬菜の栽培の好適地であったが、明治二十三年鶴出古木の田中吉平が福島県伊達郡立木村の御手代社で養蚕業を学習して帰郷、兄の園太郎とともに「伊達赤城」と称する桑苗の植栽を奨励するに至って、養蚕業とあわせて桑苗の養成が盛況となる。加えて明治二十三年信濃川改修工事のため、子成場部落より鶴出古木方面に移住するものがあつたが、以後果樹・苗木・盆栽・花木の小須戸の園芸は着実に販路を広げていく。

紫金牛(コウジ)事件

二十種ばかりの小さな茎の先に、緑の葉にかこまれた赤い実をつける可憐な植物。コウジ、漢名・紫金牛。新潟県では一般に「コウジ」とよばれている。しかし、園芸植物としてのコウジは実よりも白や黄色の斑(ふ)の入った変わった葉を觀賞するもので、その流行は江戸時代からあり明治になってその流行は頂点を達し、とくに明治二十七八年頃には、小須戸・小倉などの園芸地帯を中心に熱狂的なブームを呼び、新潟・三条・燕方面から買い手が殺倒した。ことに「日の司」「天の川」等は差芽して根付けすれば一鉢五円(当時の米一俵)

になり、押芽の多くある親木一鉢と田んぼ二反歩と交換した話もある。コウジの投機的売買は絶頂に達し、倒産者も続出、さらには官吏の贈収賄にも使われるようになり、時の県知事は明治二十九年九月十六日諭告を発してこれを抑制した。即時コウジは売買がでなくなり、一瞬コウジ成金の火は消え、借金と売れないコウジのみが残り、財産を棒にふる人が続出した。翌三十年二月よりは、一定

の業者に限り鑑札を与えたので(左写真)常態を逸した流行は衰えた。このコウジ事件により家業を捨てた一時的な投機者で倒産・夜逃げをした町民もあつたが、小須戸とくに鶴出古木の専業植木屋は財を増して、それを設備投資に当て、着実に経営を拡大して行った。大正に至って再びコウジブームまた、葵・万両のブーム等があるが、明治のコウジ事件が今でも小須戸園芸史の最大の語り草となっている。

長井利夫氏蔵

